

答志島の戦争遺跡

扇 野 耕 多

はじめに

戦争遺跡とは、近代以降の国内外の戦争とその遂行過程で形成された遺跡の事をいう。^①三重県内においても戦争遺跡は多く確認されている。平成一八（二〇〇六）年に三重県歴史教育者協議会が刊行した『三重の戦争遺跡 増補改訂版』^②は、県内の戦争遺跡を網羅的かつ詳細に調査がなされている。『三重の戦争遺跡 増補改訂版』が刊行されてからも、次々と県内の戦争遺跡が確認され、調査がなされていった。平成二一（二〇〇九）年、三重県磯部町にて、陸軍が構築したコンクリート製のトーチカや多くの地下壕など、本土決戦に備えた陣地群について報告されている。^③また、同年に、明野陸軍飛行学校に関連す

る掩体群や格納庫などの遺構について報告された。^④平成二六（二〇一四）年には、尾鷲市中村町で、伊勢防備隊の司令部が置かれていたといわれる大規模な地下壕が報告されている。^⑤さらに平成三〇（二〇一八）年、度会郡大紀町にて、本土決戦のために構築されたコンクリート製トーチカをはじめとする多くの遺構が確認された。今まで報告されてきた県内の本土決戦用陣地は臨海部に集中しているとされてきたが、度会郡大紀町の陣地遺構が確認されたことによって山間部でも同様に本土決戦の準備が行われていることが明らかとなった。^⑥また同年に、これまで明確な本土決戦用陣地が確認されてこなかった鳥羽市菅島にて坑道式掩体や露天式掩体などの遺構を確認し、菅島の本

土決戦用陣地群を報告した。^⑦

こうした成果は、平成三〇（二〇一八）年八月一日から

二〇日の三日間にわたって戦争遺跡保存全国ネットワーク主催の「第二二回戦争遺跡保存全国シンポジウム愛知豊川大会」戦争遺跡の保存と次世代への継承」において山本達也氏が『三重県南部の地下壕調査―近年の成果を中心に―』と題するレポートを発表した。このように、近年においても県内で戦争遺跡が次々と確認される状況にある。そのような中で、今回更なる調査によって今までに報告されていない本土決戦用と思われる戦争遺跡を三重県鳥羽市の答志島にて確認することができた。本稿では答志島にて新たに明らかとなった戦争遺跡についての報告をしていきたい。

(一) 太平洋戦争末期の答志島周辺の部隊配置

太平洋戦争での戦局悪化に伴い日本は本土決戦が現実的となり、全国各地で本土防衛の準備が進められていった。陸軍は、東海方面の本土防衛準備のため昭和二〇（一九四五）年二月一日に第十三方面軍（東海軍管区）を創設した。同方面軍は、同年四月八日に増強され、第四百四十三師団や第五百十三師団が新たに新設された。⁸⁾ 第五百十三師団（護京師団）は京都で編成され、「伊勢湾ニ対スル敵艦船ノ侵入ヲ防止シ、伊勢神宮ヲ防衛スベシトノ任務ヲ受ケ師団ノ一部ヲ渥美半島伊良湖岬附近ニ

主力ヲ志摩半島宇治山田市附近ニ配置シ防衛作戰ノ準備」を行つた。⁹⁾ また第五百十三師団（護京師団）は、師団司令部を神宮皇學館大學に置き、歩兵第四四一連隊、歩兵第四四二連隊、歩兵第四四三連隊、歩兵第四四四連隊、速射砲隊、通信隊、輜重隊、兵器勤務隊、野戦病院、砲兵隊から編制された。このなかで、志摩、鳥羽方面に部隊を展開していたのが歩兵第四四二連隊と歩兵第四四三連隊である。歩兵第四四二連隊は、四月一〇日に京都で編成され、志摩郡磯部村国民学校に連隊本部を置いた。磯部から五ヶ所湾、鵜方から国府から波切、和具から御座、五ヶ所湾北部山間部、小川郷、栃原など志摩半島南部を中心に配備され、本土決戦準備を行つた。歩兵第四四三連隊は、五月一〇日に久居で編成され、鳥羽市の常安寺に連隊本部を置いた。鳥羽から加茂、答志島、菅島、石鏡から千賀、青峰山、朝熊など志摩半島北部を中心に配備され、本土決戦準備を行っていた。今回報告する答志島は、同連隊の第二大隊が担当地区であり、また大隊の本部が置かれ、菅島にも部隊を展開していた。¹⁰⁾

一方で、海軍は本土決戦に備え特攻戦隊（楠部隊）を組織した。御前崎から伊勢湾・紀伊半島南岸までの防衛を第四特攻戦隊担っており、この部隊は鳥羽方面を中心に配備された第一三突撃隊（風部隊）と志摩方面を中心に矢湾から五ヶ所湾にかけ

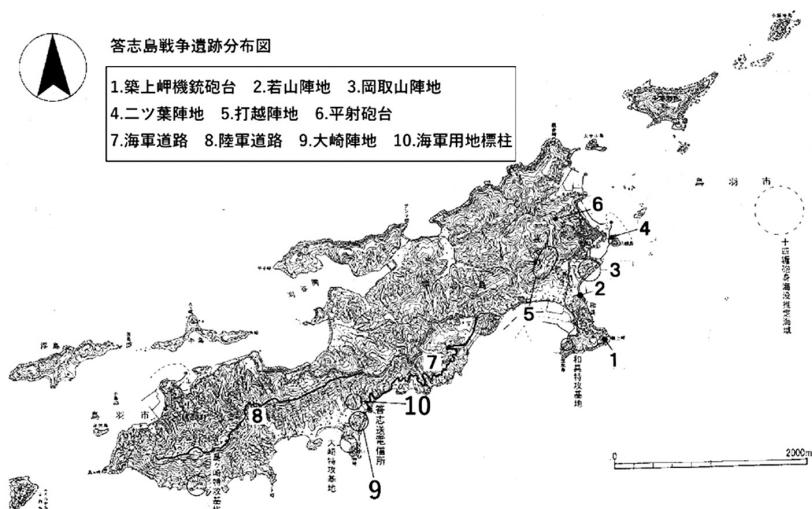


図1 答志島の戦争遺跡分布図（三重県歴史教育者協議会『三重の戦争遺跡 増補改訂版』つむぎ出版二〇〇六年一四七頁）より引用一部筆者加筆）

て配備された第一九突撃隊によって組織された。第一三突撃隊（嵐部隊）は、答志島にも配備されており、島内には、島ヶ崎特攻基地、大崎特攻基地、和具特攻基地の三つの特攻基地が存在した⁽¹⁾。島ヶ崎特攻基地の「兵器保管現状」について「(一)80kW発電機装備中(二)由式圧縮ポンプ装備中(三)魚雷二〇本格納(四)機上機二台」とあり、大崎特攻基地と和具特攻基地は「兵器未着」とされている。また、島ヶ崎特攻基地には特殊潜航艇「蛟龍」が、大崎特攻基地と和具特攻基地には特殊潜航艇「回天一型」が配備される予定であったが「特攻兵器ハ加布良古ノミ到着⁽²⁾」とあり、答志島の特攻基地において特攻兵器は未配備のまま終戦を迎えたことがわかる。

(二) 既に確認されている戦争遺跡

三重県鳥羽市の伊勢湾口に位置する答志島では、これまでに数多くの本土決戦用と思われる戦争遺跡が報告されており、これらについては、平成一八（二〇〇六）に三重県歴史教育者協議会が刊行した『三重の戦争遺跡 増補改訂版』が詳しい。

それによれば、海軍が構築したと思われる機銃砲台の関連遺構（1. 築上岬機銃砲台）や本土決戦のために陸軍が構築したと思われる陣地群（2. 若山陣地 3. 岡取山陣地 4. 二



写真1 平射砲台内部

ツ葉陣地 5. 打越陣地)、また十四センチ砲が設置されていた海軍のコンクリート製砲郭(6. 平射砲台、海軍が構築した総延長二八三〇mの道(7. 海軍道路)、陸軍が構築した総延長二七八〇mの道(8. 陸軍道路) などが残っている。

また島内には、海軍の特攻基地が確認されている。特攻基地は三か所存在し、島ヶ崎基地には特殊潜航艇「蛟龍」、大崎特攻基地と和具特攻基地には特殊潜航艇「回天」型¹³⁾のための地下壕やその関係遺構が数多く確認されている。

(三) 調査によって明らかとなった戦争遺跡

9. 大崎陣地

大崎特攻基地より北に約二〇〇mの丘陵には、本土決戦用に構築されたと二つの地下壕と掩体が一つからなる陣地が確認することができた。なお、陣地名は当時の呼称が不明であるため便宜上小字名を冠して命名した。

・地下壕①(図2・図3・写真2・写真3)

本地下壕は丘陵の西向き斜面に立地している。全長約五m八〇cm、開口部の幅は約二m六〇cm、高さは約二m一〇cmの規模で、地下壕入り口の平面プランは屈曲した構造になっており、

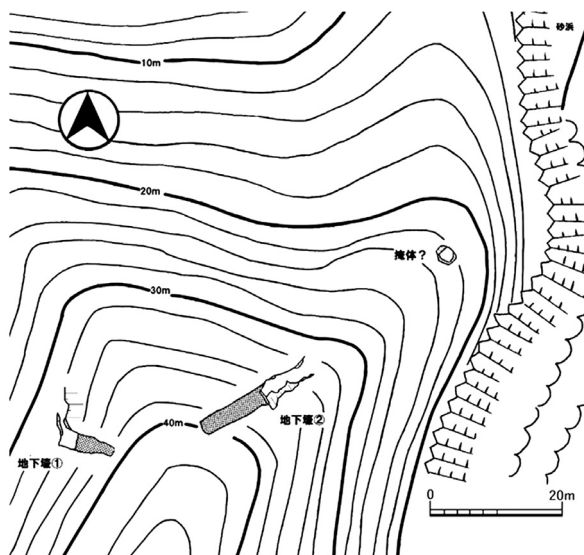


図2 大崎陣地遺構群

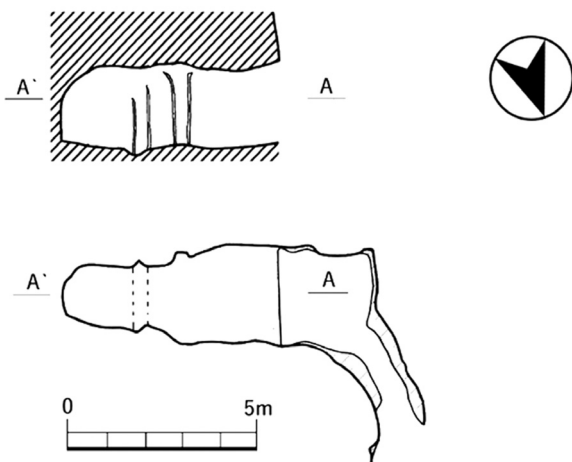


図3 地下壕①実測図（1：200）

おそらく爆風対策だと考えられる。壁面の両側二対には壕を強化するために用いられた坑木を設置するための掘り込みが見られる。また、開口部から三m五〇cmの地点の床面には幅二〇cmほどの坑木の掘り込みが見られる。陣地の構造から陸軍が構造したと考えることができる。また、規模的に構築途中で未完成だと思われる。



写真2 地下壕①内部



写真3 地下壕①開口部

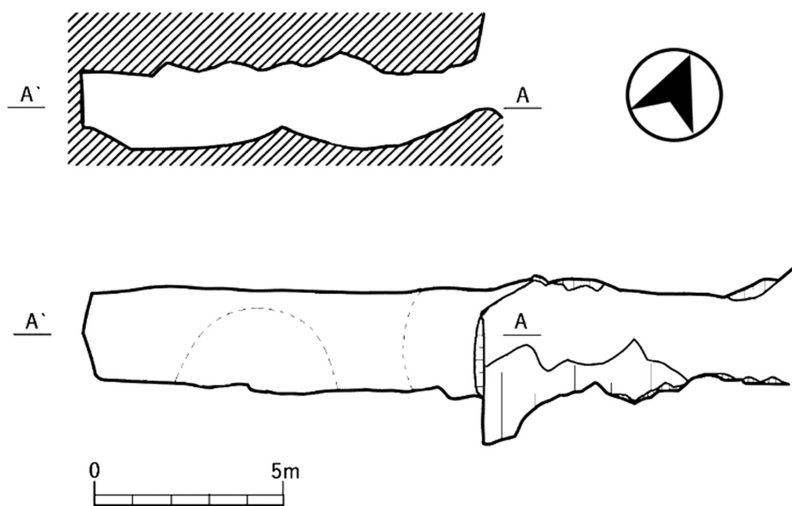


図4 地下壕②実測図（1：200）



写真4 地下壕②開口部

・地下壕②（図2・図4・写真4）

本地下壕は丘陵の北向き斜面に立地している。全長約一〇m七〇cm、幅約二m七〇cm、高さ約二mから二m六〇cmの規模である。先ほど述べた地下壕①と幅や高さなどの規模や位置的関係から最終的には地下壕①と地下壕②は、繋ぐ予定だった可能性が考えられる。

・掩体（図2）

地下壕②から約三〇mの場所には、南北に二m四〇cm東西に二m二〇cm深さ七〇cmの規模の掩体と思われる遺構が確認できた。

10. 海軍用地標柱（写真5）

大崎陣地から北へ約二〇〇mの地点に位置する丘陵で、角型波線二本印刻の下に「海軍用地」と記されたコンクリート製の標柱を四本確認できた。『三重の戦争遺跡 増補改訂版』によると、今回海軍用地標柱が確認できた場所から東へ約一〇〇mの地点には全長約二八三〇mの海軍道路があり、そこにも同様の海軍用地標柱が一二本確認されている。¹⁴ 今回確認できた四本の海軍用地標柱は海軍道路と何かしら関係がある可能性が考えられる。



写真5 海軍用地標柱

（四）まとめ

従来の答志島の戦争遺跡に関する報告は、島の東部海岸沿いに集中した陣地が中心であったが、今回の調査では島の西部にも陣地が構築されていたことが明らかとなった。今後の調査次第では更に多くの遺構を確認できると思われる。

最後に今後の課題について述べていきたい。終戦時における東海地方の部隊配置が確認できる史料として防衛研究所蔵の「大東亜戦争東海軍陣地編成図」（図5）があげられる。¹⁵ その史料の註記には左記の説明が示されている。



図5 大東亜戦争東海軍陣地編成図
(防衛研究所所蔵)

- 一、朱書セルハ第一次骨幹築城ノ完成セルモノヲ示ス
- 二、青書セルハ第二次築城ヲ實施スヘキ沿岸陣地編成ヲ示ス
- 三、黒書セルハ海軍部隊関係ヲ示ス
- 四、^(特)ハ海軍特攻基地ヲ示ス⁽¹⁶⁾

本稿で述べた答志島の戦争遺跡や、近年報告された度会郡大紀町の本土決戦用に構築されたコンクリート製トーチカをはじめとする周辺の陣地群、また拙稿の菅島の本土決戦用陣地群は、いずれも青書で記されており、「第二次築城ヲ實施スヘキ」陣地であることがわかる。このように「大東亜戦争東海軍陣地編

成図」にて「第二次築城ヲ實施スヘキ」陣地と青書で記された箇所には現在も多くの陣地遺構を確認することができ、「第二次築城ヲ實施スヘキ」陣地の構築はある程度進んでいたといえる。そのため今後、「第二次築城實施スヘキ」陣地と記された箇所の調査を行うことで、さらに多くの戦争遺跡を確認できるものと思われる。「大東亜戦争東海軍陣地編成図」にて「第二次築城實施スヘキ」陣地と記された箇所に残る遺構を詳細に調査することは、県内の本土決戦準備の状況を明らかにするひとつの手がかりとなるであろう。

付記

本稿に掲載した地図は三重県共有デジタル地図一万分の一地形図、二千五百分の一地形図を使用しました。また、写真は著者が撮影したものです。

「大東亜戦争東海軍陣地編成図」は防衛研究所の許可をいただいて掲載しています。

註

- (1) 十菱駿武・菊池実『しらべる戦争遺跡の事典』（柏書房、二〇〇二年）一四頁。
- (2) 三重県歴史教育者協議会『三重の戦争遺跡 増補改訂版』（つむぎ出版、二〇〇六年）
- (3) 山本達也『三重県の軍事遺跡1—志摩市市磯部町の陣地群について』『軍装操典第95号』（全日本軍装研究会、二〇〇九年）六一頁～七二頁。
- (4) 山本達也『三重県の軍事遺跡2 明野飛行場関連の現存遺構について』『軍装操典第98号』（全日本軍装研究会、二〇〇九年）四五頁～六一頁。
- (5) 山本達也『三重県の軍事遺跡5 尾鷲市中村山地下壕』『軍装操典第116号』（全日本軍装研究会、二〇一四年）八頁～一三頁、山本達也『三重県の軍事遺跡6—潜水母艦「駒橋」の御紋章と関連遺跡』『軍装操典第118号』（全日本軍装研究会、二〇一四年）七頁～一三頁。
- (6) 山本達也『三重県の軍事遺跡7 大紀町野添の本土決戦陣地』『軍装操典第132号』（全日本軍装研究会、二〇一八年）三頁～一八頁。
- (7) 拙稿「菅島の戦争遺跡」『皇學館論叢』五一卷三号（皇學館大學人文學會、二〇一八年六月）三九頁～五三頁。
- (8) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書本土決戦準備1—関東の防衛—』（朝雲新聞社、一九七一年）四九六頁～四九八頁。
- (9) 稲村豊二郎『第百五十三師団長としての終戦時体験』（防衛研究所所蔵）
- (10) 註2 一七六頁～一七七頁。
- (11) 同右 一二頁～一三頁。
- (12) JACAR（アジア歴史資料センター）RefC08011205500「[阪復] 引渡目録 第2復員局 ①—引渡目録—214」（防衛省防衛研究所）
- (13) 註2 一一四頁～一一八頁、一四七頁～一五五頁。
- (14) 同右 一五二頁～一五四頁。
- (15) 山本達也『志摩半島の本土決戦陣地—いわゆるトーチカを中心として—』『足跡』第5号（皇學館大学考古学研究会、二〇〇三年）四八頁～五〇頁。
- (16) 「大東亜戦争東海軍陣地編成図」（防衛研究所所蔵）

（おぎの こうた・皇學館大学文学研究科

国史学専攻博士前期課程）